

「科学批判から脱原発の哲学へ」(田口卓臣)

●1 : <共>に書く

>デイドロは常に誰かと共に書いた思想家

『百科全書』=デイドロ+ダランベール

デイドロの単著=先行テキスト(群)に対する対話的+論争的關係

→ベーコン、ニュートン、ライプニッツ、リンネ、ビュフォン、モーペルチュイへの介入

>「共に書く」とはどういうことか?

2人で書く+先行仮説に介入

微細な差異から「特異性」を抽出

●2 : <例外>+<極小の偏差>からまなざす

例外から基準を、異常から正常を、逸脱から規範を疑う。

アブダクションの思考=パースによる帰納法批判

特異性の思考の系譜=ベンヤミン、カンギレム、フーコー

静止した物質にも「運動」が潜在する=ルクレティウスの原子論

大きな逸脱運動に結果しうる原子の潜勢力

→カタストロフィ(均衡・秩序の解体可能性)の必然性

→原発のノーマル・アクシデント

●3 : <科学>を駆動する「形而上学への欲望」

>客観的中立性がどのような場面で、イデオロギーに変容するのか?

「形而上学への欲望」が、国家や資本の論理と結びつくと手がつけられない。

>伝統的な思想史の常識

幾何学 vs 実験科学の対立

→ベーコン主義的な実験科学は「事実」と「帰納」に基づいて、「悟性」の嘘を暴く、とされた

→しかし、デイドロ、アドルノ=ホルクハイマーの見方は全く異なる。

>「批判的科学」の可能性の条件

デイドロの自然哲学は、公害から文明社会の構造的差別をまなざす批判的科学のスタンスと親和的。

「例外状態」にこそ、全体の構造を読み解く鍵を見出す。

<引用>

「全体の傾向から漏れた一つの例については、それがきわめて稀れなことで、ほんの誤差の範囲内と見られる場合でも、その例自身については、それは誤差ではない。99.9%は完全に適用できる場合でも、その残りの0.1%に当たった人に対しては、それは100%の誤差なのである。」(中谷宇吉郎『科学の方法』岩波新書、1958年、pp.13-14)

「特異なものよきは、それが、それを受け入れることのできない体系を解体する力にある。またそれは、自然すなわち特異性を産むものが法則や規則の首かせの中にしぼられたままでいることに対抗する抵抗力をもつということの保証となる点にある。特異性によって、自然はその野生を主張する。カモノハシ(…)の記述で有名になった博物学者、ブルーメンバハハはこう書いている。「ふだんの歩みの外への自然の逸脱のほうが、ときにその普通の規則正しい流れよりも、よく分からない研究に光を当てる例はいくらかもある。」(ジョルジュ・カンギレム『科学史・科学哲学研究』「生物学のエピステモロジーにおける特異なものの特異性について」、法政大学出版局、1991年、pp.246-247)

「科学的言語の党派的な不偏性のうちでは、力なきものは完全に自らに表現を与える力を喪失し、現存するものだけが、言語の中立的な記号を見いだす。そうした中立性は、形而上学よりも形而上学的である。啓蒙はついにさまざまなシンボルだけでなく、その子孫である一般概念を喰いつくしてしまった。そして形而上学の中の残されたものは、形而上学がそこから生み出された集団性への抽象的不安以外の何ものでもなかった。諸概念は啓蒙の前では、産業トラストの前での利子生活者同然である。」(アドルノ＝ホルクハイマー『啓蒙の弁証法 哲学的断想』、岩波文庫、2007年、p.55)

「チェルノブイリ後、私たちが住んでいるのは別の世界です。前の世界はなくなりました。でも人はこのことを考えたがらない。このことについて一度も考えてみたことがないからです。不意打ちを食らったのです。／(…) なにかが起きた。でも私たちはそのことを考える方法も、よく似たできごと、体験も持たない。私たちの視力も聴力もそれについていけない、私たちの語彙ですら役に立たない。私たちの内なる器官すべて、それは見たり聞いたり触れたりするようにできているんです。そのどれも不可能。なにかを理解するためには、人は自分自身の枠から出なくてはなりません。／感覚の新しい歴史がはじまったのです。／(…) 一人の人間によって語られるできごとはその人の運命ですが、大勢の人によって語られることはすでに歴史です。二つの真実——個人の真実と全体の真実を両立させるのはもっともむずかしいことです。今日の人間は時代のはざまにいます。(…) 何度もこんな気がしました。私は未来のことを書き記している……。 (スベトラーナ・アレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り 未来の物語』「見落とされた歴史について——自分自身へのインタビュー」岩波現代文庫、p.29-p.32)